

佐々木晃也氏の発表についての

質疑応答

(質問者 1 名)

【質問】 松田毅 (神戸大学)

本発表では『スピノザと表現の問題』(SPE)などが扱われますが、発表は、基本的にスピノザ研究というより、ドゥルーズ解釈であり、司会者のドゥルーズやドゥルーズ研究に関する知見は非常に限られているので、言わば、素人の質問であることをお断りしておきます。

佐々木氏の発表の趣旨は明確です。つまり、SPEが「実存主義的解釈」であること、また、その解釈がドゥルーズのスピノザ解釈の「ピーク」ではないことというものです。この2点について司会者自身は、原稿から領ける部分もあるのですが、その主張の新規性や文献学的な裏付けも含め、その是非を正確かつ厳密には判断できません。ただ、訳語も含め、原稿の言葉遣いのなかに、あまり説明がないままに、論述にとって重要なものとして使用されているものがあることや、通常の哲学・哲学史の一般的概念に関する独自とも言える解釈もあり、一読者としてはもう少し説明が欲しいというものがありました。

1. 1 頁：表象と「表現」、「道德」と「倫理」の違いは何でしょうか。
2. 2 頁：「水平的な」哲学史と「垂直的な」哲学史の対比がありますが、具体的な違いは何でしょうか。
3. 3 頁：(これは立ち入った内容理解に関わるのですが、) 原稿には『知性改善論』の「真の観念」の形成過程が論じられていない、などとあります。スピノザはこれを、反省的知識・認識の問題として論じているように思われますが、そうではないと主張されるのでしょうか。もしそう主張されるなら、スピノザ研究としてはもっと多くのことを論じる必要があると思いますが、いかがでしょうか。
4. 3 頁：「観念」が「一つの産出された事物」であり、それが「17 世紀哲学の共通理解」である、とされていますが、この主張は司会者には抵抗があります。何かそう言える、学説的な根拠があるなら挙げてください。またこの場合、産出するのは誰あるいは何でしょうか。同じ疑問は、「経験論者」としてのスピノザというドゥルーズの解釈、特に、表現的観念の「理性への生成」という把握についてもあり、スピノザ研究として見ると、問題的吗と言えます。
5. 4 頁：「関係比 rapport」ですが、「比」がどのような意味をもつのか、定かに説明がされていないように思います。
6. 初期近世哲学史の研究をしている者として、全体を通しての感想ですが、スピノザ研究と

ドゥルーズ研究の関係についてどのようにお考えでしょうか。

ここは原稿の文章の書き方について、コメントする場ではありませんが、推敲不足ないし変換ミスもあるようなので、ご注意ください。

【回答】 佐々木晃也（大阪大学）

ご質問ありがとうございます。私の深刻な説明不足があり、誠に恐縮です。松田氏に正しくご指摘いただいたように、本発表は「スピノザ研究というより」ドゥルーズ研究としての発表です。

ドゥルーズは、70年頃（『スピノザと表現の問題』）、80年頃（『スピノザ 実践の哲学』）、90年頃（「スピノザと三つのエチカ」）の三つの時期のスピノザ解釈を残しており、多くの哲学者の中で、とりわけスピノザに特別な関心を持っていました。私はこの「三時期の解釈の変遷」を研究主題とし、SPEを読んでいます。そのため私は、ドゥルーズが「いかに正しく理解したか」（その一致・不一致の理解）ではなく、スピノザを自らの「哲学的協力者」の一人とすると同時に、自身の思考を解明するために批評する思想家とすることにおいて、そこでドゥルーズ自身の思考のいかなる秘密が明かされているのか、を問題にしています¹。この上で本発表では、ドゥルーズのキルケゴールとの隠れた共鳴ないしはその「実存主義」を示そうと試みました。

ですので、順番は前後しますが、先に最後のご質問（6「スピノザ研究とドゥルーズ研究の関係」）にご返答しますと、まず、ドゥルーズの影響を受けずにスピノザ研究をすることがもはや困難となっていると指摘される（Sévérac&Sauvagnargues 2016 p. 10）現在において、ドゥルーズの70年頃の解釈と80年頃の解釈の混同、とりわけSPEのみを参照したドゥルーズ批判は厳密さに欠ける、と思われまます。SPEは未完成であり、少なくとも、本発表の結論部で唆したように、時期によって解釈が異なります。しかしそうすると、ドゥルーズのスピノザ解釈とは最終的にどのようなものだったのか、疑問が出てくるでしょう。これはスピノザ研究からドゥルーズ研究に差し向けられる問題です。また上述の事情ゆえに、ドゥルーズ研究においても無視できない問題の一つです。そして私は、ドゥルーズ研究として、この問題にもし一定の解答を与えることができれば、それは返す刀で、スピノザ研究への寄与となるのではないかとそのような関係で考えています。

残りの質問に戻ります。以下では、まずスピノザ研究として見た際の二つの質問（3と4）に返答します。スピノザ研究それ自体についての私の勉強不足があり、正直なところ、この二点に関して先行研究との関連で厳密にお答えできませんが。そしてその後、語の意味の質

¹ こうした研究観は、Russell Fordの*Immanence and Method: Bergson's Early Reading of Spinoza*.(2004, The Southern Journal of Philosophy, Vol. XLII).のスタイルを参考にしています。

問（3と5）に順に返答し、最後に二つの哲学史に関する質問（2）に返答します。

3：『知性改善論』における最初の「真の観念」の形成過程に関して

スピノザ研究でこの点に関してどのような議論がなされているのか、正直なところわかりません。『知性改善論』では、方法の出発点となる真の観念が所与であることが仮定され、方法の第一段階として、真の観念を他の一切から区別し、遠ざけることが問題とされます。SPEではこの点が第8章で論じられています。方法の第一段階は、精神の内にある諸観念の中にあるはずの所与の真の観念を見分けることとしての反省的認識です。最初の真の観念の形成過程自体は語られていません。真の観念は所与です。ですので、こう言ってよければ、『エチカ』に比べて『知性改善論』の「人間」はあらかじめ、少し「理性的」です。そして『知性改善論』の主題は、そうした「人間」がより理性的になっていくための出発点の獲得、およびそこから英知の最高峰に達するための論理学（方法の本性と諸規則）です。

他方で、『エチカ』では、最初に所有される真の観念は、第二種認識がそれに基づくところの十全な観念、つまり、「共通概念」です。発表で述べたように、『エチカ』における生来の人間は第一種認識の状態（共通概念を持っていない状態）にあります。こちらでは、最初の真の観念=共通概念は所与として仮定されていません。ドゥルーズの経験論解釈が問題にしているのは、この実践的な形成の秩序です。

4：「観念」に関する17世紀哲学の共通理解、及び、ドゥルーズの経験論解釈、特に表現的観念の「理性への生成」という把握に関して

ご指摘ありがとうございます。ここは私の推敲の不十分さが顕著に現れていると思います。恐縮ですが、「観念が一つの産出された事物」の「産出された」という部分は削除したいと思います（「スピノザの場合は」「観念は産出された事物」であり、産出するのは神です）。観念がそれ自体「一つの事物である」ことについては、ドゥルーズ自身の理解を踏まえています。

次に経験論解釈についてですが、「スピノザ研究として見ると、問題的」という指摘は、その通りです。スピノザ研究では、柴田論文「真理と生—スピノザの知識論再考」（2005、日本哲学会『哲学』第56号、二〇七-二二一頁）や福居論文『スピノザ「共通概念」詩論』（2010、知泉書館）がこのことを批判的に指摘しています。そしてドゥルーズ研究では、この批判を浅野（2018）が取り上げています（とはいえ、浅野が論じるは、この反論への再反論ではなく、ドゥルーズが「どうしてそのように誤読せねばならなかったか」です）。

経験論解釈は確かに問題的ですが、しかし、そうであるにしても、いかにして第二種認識になる（最初の共通概念の形成がなされる）のか、という問題は依然残るはずですが、つまり、その評価はどうあれ、ドゥルーズの経験論解釈は「スピノザの哲学の開始」というスピノザ研究の根本問題の一つを提示することができました。私としては、ドゥルーズのスピノザ解釈が、問題的であるかどうかは、上に述べたように、70年頃の解釈と区別される80年頃の

再解釈、その理論的再構成を検討した後でなされるべき、と考えています。

1：表象と「表現」、「道德」と「倫理」の違い

「表象」とは、延長的事物とその事物の観念の对象的 content との一致を意味します。対して、表現とは、延長的事物の本質（形相的原因）と観念の対応を意味します。

例えば、「一つと同じ点から等距離にある点の軌跡」としての円の観念は、延長的事物としての円を表象する、あるいは円とその円の観念は表象的關係を持っています。「一端が固定された直線の運動によってできる図形」としての円の観念は、円を表象するだけでなく、円の本質を説明しています。この命題における意味（「一端が固定された直線の運動」の部分）は、円の本質（形相的原因）と一致し、それを説明しています。なので、後者の命題（表現そのもの）は、延長的事物としての表象的關係を持つと同時に、表現的關係をも持っています。

円にはその本質があり、円の観念にもその本質、その観念それ自体の形相的原因としての思惟の力能があります。本質と力能の同一性です。倫理と道德の違いについて言えば、倫理とは、あらゆる力能を肯定し、実現すること、つまり、ここで言えば表現的生成を無媒介的に肯定する思想であり、対して、道德は、諸力能の中に実現されるべきものとそうではないものとの区別を媒介することで、結局のところ、存在そのものに優り、諸存在者を裁くことの超越的審級を保持する判断のシステムに従うことで、初めて諸本質=力能の実現を認める思想です。

5：「関係比 rapport」の「比」の意味について

説明不足、大変申し訳ありません。以下、説明します。

まず、「rapport」の定訳はおそらく「関係」です。「比」という語を付した消極的な理由は二つあります。一つは、「relation」との区別が付かなくなること、もう一つは、SPE と同年の『差異と反復』の財津訳で「関係-比」と訳されていることです。積極的な理由は、ドゥルーズのスピノザ的個体の運動的な理解に由来します。

SPE における単純物体、すなわち、無限に多くの微粒子群の集合体は、一定の運動と静止の構成関係によって成り立っています。この構成関係は、その持続において恒常的ですが、ドゥルーズは、この恒常性を、一定の運動と静止の構成関係を含む全体的な「比 proportion」によって定義します。そして、外部の物体との出会いにおいての關係の複合あるいは分解とは、厳密には、ある時点で具現されている關係が、別の時点で具現されなくなること、あるいはその逆を意味します。ですので、厳密に言えば、その持続において変化するのは、關係そのものではなく、關係を含む「比」の方かと思われます。それゆえこの意味を考慮し、また relation との混同を避けるために、「rapport」に「關係比」という語を当てました。

2：「水平的な」哲学史と「垂直的な」哲学史の具体的な違い

まず、ドゥルーズが自らの方法論的な師としていたと伝えられるマルシャル・ゲルーの考えから説明します。

ゲルーによれば、水平的な哲学史の利点は、ある学説の歴史的側面を獲得できることです。この哲学史観は、学説の内的構造の理解を犠牲にし、それを主要な諸テーゼにまとめることに努めます。そして、タレスで始まりハイデガーで終わるといような哲学の歴史の中で、諸テーゼによって特徴付けられたその学説と他の学説との繋がりや転換の理解に努めます。ゲルーはこの水平的な歴史観に基づいた哲学史の方法を「典拠と評伝の方法 *méthode des sources et de la biographie*」と呼んでいます。そして、この方法は、方法全体の前段である限りにおいては有効であり、また不可欠でもあるが、これだけで十分ではない、とゲルーは考えます。

垂直的な哲学史の利点は、ある学説の哲学的側面を獲得できることです。この哲学史観は、学説の内的構造の理由の探究に努めます。前段としての典拠の評伝の方法によって明らかとなった諸テーゼは互いに連関する一つの構造をなしています。垂直的な哲学史観において問題となるのは、この構造がなぜそうなっているのか、の理由の発見です。そして、諸テーゼの設定およびその構造的連関を支配している一つの理由の発見に努める哲学史の方法は「構造の方法」と呼ばれています。

ドゥルーズは、初期のモノグラフ（ヒューム論）からゲルーの二つの哲学史観、とりわけ、後者の構造の方法の考えを受け継いでいると思われます。まずドゥルーズにとって、一つの学説は一つの概念群ですが、諸概念の意味はそれらがその答えとなる場所の諸問題によって理解しなければならないものです。この意味で一つの学説は、諸問題とそれに対する答えとして諸概念からなる構造物です。しかしこの構造的な理解だけは、哲学的というより科学的であるので、哲学史研究においては、その理由としての一つの問いを突き止める必要が主張されます。そしてその意味で、ドゥルーズは、一つの哲学理論とは「徹底的にその意味が展開された一つの問い」である、と考えています。

私はこのドゥルーズ自身の哲学史研究観に従って、SPE を読解しました。その時、SPE を支配している一つの問いは「生来、人間は非表現的であるにも関わらず、いかにして表現的になるのか」です。この問いは大きく二つの問題を含んでいます。「生来の非表現性」がその帰結となる場所の「人間の条件」の問題と、その上での「表現的生成」の問題です。それゆえ最初の共通概念の形成の問題は、SPE の中心的問題であり、その解答が共通概念の形成の理論、とりわけ、二つの理性概念です。そして私は、この二つの理性概念のドゥルーズの裁断の仕方に、ドゥルーズの思考の秘密、その解釈の独自性が現れていると考え、「実存主義的解釈」を結論しました。